

香港の日本語教育とプロフィেশンシー

—調査報告と今後の課題—

宇田川洋子(国際交流基金)

1 はじめに

香港の日本語教育における近年の大きな課題は、日本語学習者の減少傾向である。一方、教育制度の改革により、日本教育が中等教育後期に正式に導入されたが、その修了資格試験に関して教授法や教材などが課題となっている。筆者は、2012年3月の着任以来、教育機関訪問によるインタビューや、所属機関である香港日本語教育研究会（以下、研究会）と協力した調査などを通じて、上記のような課題を中心とした香港の日本語教育に関する詳細な現状把握に努め、日本語教師や教育機関のニーズを理解し、そのようなニーズに対応した支援を行いたいと努めてきた。本発表では、プロフィেশンシーという視点から、調査報告を中心とした香港の日本語教育の現状を紹介すると同時に、今後の課題と可能性に関して考えたい。

2 香港の日本語教育に関する調査報告

2.1 学習者の減少とその要因に関する調査報告

香港では、2009年ごろから、特に学校教育以外の日本語教育機関（語学学校など）で日本語学習者の減少が見られている。また、研究会が香港・マカオの実施機関である日本語能力試験（以下、JLPT）でも、2009年の2回の試験の応募者数の合計が20637人だったのをピークに、2010年は14559人、2011年14589人、2012年12896人と、減少の傾向にあった（研究会2013）。

そこで、研究会では、JLPTの受験者数減少については日本語学習者の減少傾向の要因を探ろうと、2012年12月のJLPTN2、N4、N5応募者637人を対象として11月に調査を実施した。この結果、研究会の教師グループが仮説として考えたように、韓国語の人氣が高まっていることや、大震災の影響による渡日への不安が見られた。また、日本語能力試験の受験を見合わせた友人や知人は、試験実施日に予定がある、自分の実力に自信がない、申し込みを忘れたなど、日本語学習そのものよりも試験に特化した理由が多いことが分かった。さらに、日本の政治や経済への不信が影響している可能性が感じられた。しかし、いくつかの点に関して明確でないところもあった（宇田川他、2013）。

このため、「日本語学習者減少の要因を探ることに重点を置いて質問を修正し、2013年6月に第2回の調査を実施した。調査協力者は、N3とN5の応募者で回答者は778人で、第1回同様、年齢層はいずれも10代から50代までだった。

調査の詳細は第1回調査については研究会論文集で報告して（宇田川他2013）おり、第2回も同様に研究会論文集で報告の予定なので、本発表では要論だけを紹介する。

①日本に関するイメージの変化

第1回調査では、「日本のイメージが最近変わりましたか」という質問で、「日本の全体的イメージ」「就職先と」「留学先」「旅行先」「日本料理」など9項目に関して、「かなり向

上」「少し向上」「変わらない」「少し低下」「かなり低下」の5つの選択肢から選ぶ回答方式とした。

第1回では、日本の料理やアニメなどのポップカルチャーなどに関するイメージと比較して、「旅行」や「留学」など「日本に行くこと」に関する項目で、いずれも「かなり低下」と「少し低下」の合計が25%を超えていた。このことから、大震災による地震や放射能汚染への不安があるのではないかと思われた。

第2回では、追加項目である「日本の政治」「日本の経済」について、「少し低下」「かなり低下」を選んだ人の合計がいずれも50%を超える結果となった。また、「旅行先」「留学先」「就職先」など「日本に行くこと」についてのイメージについて、「かなり向上」あるいは「少し向上」とした人の割合が第1回調査よりも増加し、特に「旅行先」は大幅に増加した。

②日本語学習者の将来の増減予想とその理由

「増える」、「変わらない」、「減る」と意見が分かれ、第1回調査では、46%、22%、32%、第2回では47%、32%、21%と、第1回と2回であまり差がなかった。「増える」（肯定的な「変わらない」を含む）理由としては、第2回の集計で回答が多い順に、「日本に旅行する人が増えるから」「日本の文化に興味を持つ人が増えるから」「日本語に興味を持つ人が増えるから」「日本が好きになる人が増えるから」となった。一方、「減る」（否定的な「変わらない」を含む）理由としては、外国語学習（韓国語が主）が第1回、第2回ともに一番多く、次いで「日本の安全性に不安があるから（第2回のみ）の選択肢」「日本の経済状態が良くないから」「中日の政治関係が良くないから」と続いた。

第2回では、さらに、以下の質問を設けた。

③日本語学習をやめたいと思ったことがあるかどうかとその理由

回答者中26.2%が「はい」と答え、その理由（複数選択可）としては「仕事や他の勉強が忙しいから（82.1%）」が圧倒的に多かった。次いで「日本語がなかなかうまくならないから（45.3%）」「会話の練習が少ないから（37.8%）」が続き、4番目の「日本語に対する興味が薄れた」以降は10パーセント代と大幅に少ない。

④日本語学習の目的

基金の機関調査（2011）や木山他（2011）の調査で質問されていた「学習目的」についても聞いてみた（注1）。「日本語でコミュニケーション」が97.95%で一番多かった（宇田川他2013）。「日本語でコミュニケーション」は、木山他（2011）の調査でも91.13%で一位となっている。次いで「日本語そのものへの興味」「日本の観光旅行」「日本が好きだから」「日本の文化（アニメ・マンガ・ポップカルチャーなど）」「日本の食べ物に関する知識」「日本の文化（文学や歴史）」となった。

【注】

- 1 木山他（2011）は、基金調査（2011）の16項目に、「日本が好きだから」「日本の食べ物に関する知識」など5項目を加えている。宇田川他調査では、木山他版を採用したが、木山調査で選択数のパーセンテージが1桁以下だった2項目を減らし、計19項目について聞いた。

ところで、基金調査(2011)と、宇田川他および木山他調査で数値的にかなり開きがある項目があった。特に、宇田川他および木山他調査で1位の「日本語でコミュニケーション」は基金調査では69.2%で3位、宇田川他および木山他調査3位の「観光旅行」は基金調査では57.7%で4位となっている。基金調査の回答者は教育者側であり、学習者数に関わらず機関につき1つの回答であるため、単純に比較することはできないが、このような差がなぜ生じたのか、もう少し調査する必要があると思われる。

2.2 学習者と学習方法の多様化

ところで、上記の調査の準備のためにデータを調べていて、香港には基金の調査(2011など)では学習者として数字に出てこない日本語学習者も少なくないことに気づいた。1984年の初回実施から今までの、香港のJLPT旧1級あるいはN1取得者は、概算で5000人を超えるのではないかとと思われる。しかし、このレベルの社会人を対象とした日本語コースを提供している教育機関はあまり多くないため、特に日本語教育機関で日本語学習を行っている人が多いのではないかとされている。また、このような超N1レベルの学習者の中には、N1を取得してしまうと、目的が見つけれず日本語学習の動機を維持するのが難しいという話も聞いている。

また、JLPTでは応募時の調査で、日本語学習の方法について聞いているが、これによると、独学で勉強する人の割合が増えている。特に、上記の事情を反映してか、N1レベルの学習者の独学の割合は、N1-N5全体よりも多くなっている。

表1 JLPT 応募者 (N1) における独学の割合 (研究会統計より)

	2010 Dec	2011 Jul	2011 Dec	2012 Jul	2012 Dec	2013 July
N1のみ	28.8%	30.4%	30.0%	28.8%	27.2%	29.50%
N1-N5	15.6%	17.1%	16.6%	17.9%	19.1%	19.3%

このような学習者の日本語学習支援やニーズの把握なども今後の課題と思われる。

2.3 後期中等教育における共通試験の導入と教師支援

香港では、2009年から導入された教育制度改革により、中等教育後期教育機関が4年から3年に減り、代わりに大学が3年から4年に増え、6-3-3-4制になった。これと同時に中等教育後期レベルは新高中課程(New Senior Secondary、以下、NSS)カリキュラムに基づいて授業が組み立てられることとなり、この修了段階で受験する共通試験として、The Hong Kong Diploma of Secondary Education (以下HKDSE) が導入された。

Education Bureau (2009)によれば、NSSのカリキュラムは必修科目、選択科目、Other Learning Experiences (以下、OLE)の3つに分かれており、日本語を含む6言語(他にフランス語、スペイン語、ドイツ語、ヒンディー語、ウルドゥー語)は、選択科目の中に含まれている。6言語の試験は、英国のCambridge International Examination (以下、CIE)のCambridge International AS Level試験(以下、AS試験)を、香港考試及評核局(Hong Kong Examination and Assessment Authority、以下HKEAA)が実施する。

研究会の2012年の調査では、中等教育で日本語を教えている学校は24校、うち、NSS

の正規のカリキュラムとして教えている学校は9校で、ほかの15校はOLEなどのプログラムとして教えている (Leung 他 2012)。また、HKEAAによれば、2011-12年度の日本語受験者は135名(HKEAA 2013)、2012-13年度試験は114名だった(HKEAA 2012)。

CIEのAS試験のシラバスは、基本的には6言語共通となっているが、日本語版では、Appendix Aとして漢字リスト(300字)、文型リスト、試験で使われる表現リストが添付されている。試験は大きくSpeaking(30%)、Reading and Writing(50%)、Essay(20%)の3つの課題から成っている(CIE 2013)。

スピーキングは口頭試問で、各自が選んだテーマによるプレゼンテーション、プレゼンテーションについての質疑応答、一般的な会話からなり、合計約20分程度の課題となっている。また、評価は、記述式の評価基準に基づいて行われる。Reading and Writingは、文の中で使われている語彙や表現、慣用句など言語知識に関する質問もあるが、文の中から特定の情報を探し出したり、要約したりという課題が多い。Essayは、与えられたテーマの中から一つを選んで600~800字のエッセイを書く。

このようにCIEの日本語AS試験導入に関しては、JLPTとかなり異なるものであることから、香港の日本語教員から教材や指導方法に関していろいろな疑問や戸惑いの声が出ていることが、前任者からの報告にもあった。そこで筆者は、着任して最初のワークショップの際に、参加者の教師に簡単な調査をしたところ、教師は以下のような点について困っているということがわかった。調査方法は、付箋1枚に1項目を書いてもらう形式で困っていることをできるだけたくさん書いてもらい、それをグループで話し合ってから別々に整理してもらった後に、ポスターを作ってもらった。カテゴリーはグループ間でかなり類似しており、これをさらに整理してリストにした。

表2 中高校生を教える教師が困っていること (2012年7月の調査から)

カテゴリー	件数	内訳
教授法	35件	会話、プレゼンテーションや作文の教授法(12)、練習やゲームの作り方(12)、日本の文化の教え方(2)、その他
教材	23件	シラバスと学習者の年齢に適した教材(21)、動画教材(2)、問題集(1)
学習者	19件	動機付け・意欲(14)、日本語を使う機会をどのように提供するか(2)
試験	13件	試験資料(過去問題・サンプルの入手法)(7)、行政(4)、日本語能力試験との関連(2)
学校	13件	時間数やクラスサイズの問題(9)、学校における日本語の位置づけ(2)、学級管理、設備
教員	5件	教師養成・教師研修(3)、教師の業務の忙しさ(1)、その他(1)
保護者	3件	保護者の干渉や期待

この結果、教師のニーズが最も多いのが、会話やプレゼンテーション、作文能力などに関する教授法と、シラバスに準じたあるいは適した教材ということがわかった。この結果はある程度予想されたので、上記の調査を行った第1回ワークショップでは、英国のJFロンドンで開発された中等教育向け教材を紹介し、その後も、研究会では、試験に関する情報提供や評価に関するセミナーなどを実施しており、今後も続けていく計画である。

ところで、2012年の成績と2013年の成績を比べると、日本語の受験者の中で、最上級

の A を取得者の割合が、34.8 パーセントから 62.7 パーセントと飛躍的に伸びているという結果が HKEAA から報告されている (HKEAA 2012、2013)。

3. まとめと今後の課題

- ① 日本語学習者減少の要因に関しては、東日本大震災、中日の政治関係、日本の経済状態の低迷、香港の人々のライフスタイルの変化などいろいろな社会的要因が影響しており、日本語教育機関で対応できることは少ないように思われる。しかし、「日本語をやめようと思ったことがあるか」の答えに見られるように、「日本語コミュニケーションをつける」「達成感を感じる」を求めている学習者がいることがわかった。この点では、香港の日本語教育機関でも、何らかの工夫ができる可能性がある。今後も引き続き調査を行い、より詳しいニーズを理解すると同時に、教室活動やコースデザイン、教材などについて香港の先生方と検討していきたい。
- ② すでに旧 1 級、N1 を取得した学習者が今後も学習意欲を持ち続け日本語学習を続けられるような方法に関する検討が必要だと思われる。例えば、Oral Proficiency Interview (以下、OPI) の活用や JLPT のオーラル試験導入の可能性についても調査していきたいが、学習者側はどのような学習あるいは日本語のブラッシュアップの場を求めているのか、なども調査する必要があるものと思われる。
- ③ 独学で学ぶ人たちは、オーラルコミュニケーションの練習をどのように行っているのだろうか。この点については、調べた限りでは、日本語教育界ではまだほとんど研究されていないように思われるので、日本語能力試験の応募の機会などを活用して、聞き取り調査などを行いたいと思っている。
- ④ 中等教育後期課程では、日本語プロフィシエンシーを目的とした日本語学習が行われているので、今後も試験や教材・教授法に関する情報提供などの支援を続けていく予定である。一方で、初等教育段階と中等教育段階、高等教育段階との外国語教育概念の連続性や、JLPT 的日本語教育とのギャップをどう埋めるかが課題と思われるが、これは香港の政策に関わることなので、情報収集を続けると同時に、香港の教育関係者とのネットワークを拡充していきたい。さらに、JLPT 試験の特定の級を、HKDSE 試験に該当する資格と認定してもらおう努力などを行うべきなのか、また、JLPT の年少者版開発の計画はないのか、なども含めて検討する必要があると思われる。

これらの香港の日本語教育における課題は、いずれも日本語のプロフィシエンシーを向上させるための教育と深いかかわりがあり、さまざまな情報を必要としている。本シンポジウム参加者の皆様、日本プロフィシエンシー研究会会員のみなさまのご提案、ご協力をお願いしたい。

【参考文献】

宇田川洋子・李夢娟・李澤森・劉礪志 (2013) 「香港の日本語能力試験受験者減少の要因を探る」『日本學刊』第 16 号, 香港日本語教育研究会

- 香港日本語教育研究会ウェブサイト (2013) <http://www.japanese-edu.org.hk/>
- 国際交流基金(2011)『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2009年』国際交流基金
- 国際交流基金(2013)『海外に日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2012年』国際交流基金
- 木山登志子・中野貴子・周宏陽・上田早苗・望月貴子・蘇凱達・青山玲二郎 (2011) 「2010年香港日本語学習者背景調査報告」『日本學刊』第14号, 香港日本語教育研究会
- LEUNG O.Y.M(2012), “Report on New Senior Secondary Japanese Curriculum & Current Situation of Japanese Language Education in HK Secondary Schools 2010-11” *Nihon Gakkan* vol. 15:The Society of Japanese Language Education
- Education Bureau (2009), *The New Academic Structure for Senior Secondary Education and Higher Education - “334”*
Web <http://334.edb.hkedcity.net/EN/index.php> (2013年9月現在)
- Cambridge International Examination (2013), *Cambridge International AS and A Level* <http://www.cie.org.uk/qualifications/academic/uppersec/alevel/>
(2013年9月現在)
- Hong Kong Examinations and Assessment Authority (2013), “2013 HKDSE Examination Results of Category C Other Language Subjects” *Release of Examination Results* (2013年9月現在)
http://www.hkeaa.edu.hk/en/hkdse/Release_of_Results/
- Hong Kong Examinations and Assessment Authority (2012), “2012 HKDSE Analysis of results of candidates in each subject” *Examination Statistics, Examination Report* (2013年9月現在)
http://www.hkeaa.edu.hk/en/HKDSE/Exam_Report/Examination_Statistics/